

生きるありがたさ

蘆

谷

重

常

(日本電話協會)

モーゼの律法は、古代の法典の中でも最も完備したものである。舊約聖書の利未記全部と其の外の書にも收められてゐる彼の律法は實にユダヤ國民の生活の軌範として、微に入り細を穿ち、完全を極めてゐる。このやうにユダヤの律法が完全であることは、ユダヤ人が遵法の精神に富んでゐたからではなくして、その反對に、むしろ甚だ非遵法的であつたからであらう。

遵法の精神が盛んなれば、法律などは極めて簡單でよい筈である。法律を守らぬ國民であるから、立法家はこれでもか、これでもかと、ますます繁鎖な法を設けなくてはならなくなる。

佛教は世界の類のない宏大な宗教である。此の宏大なる宗教を生んだ印度は、世界一に精神的にすぐれた國であつたかといふと、これ亦その反對である。原始佛教時代の印度がいかに道德頹廢し、腐敗墮落を極めてをつたかは佛典にあからさまに描寫されてゐる。そのやうな墮落した國民であつたからこそ、佛の出現の必要があつたのであらう。

國は一人の力を以ては興らない。いかなる偉人が現れても、墮落した民族を興すことは不可能である。モーゼもキリストも、ユダヤを興すことはできなかつた。釋尊の大徳を以ても、印度は救はれなかつたのである。國民の一人々々がしつかりしなければ、國家は興らぬ。

我が國は由來、偉人の出現せぬ國である。益世の英雄といふやうな人は、二千六百年の歴史を通じて豊太閤あるのみだ。現在、この空前の時局に際しながら、一人ヒットラーない、ムツソリーニがない。團栗のせいくらべであるが、何うにか斯うにか難局と突破してゆくことのできるのは國民全體が
らいからである。

かういふ國體にあつては、繁鎖な法律や複雑な思辨の必要がなかつた。されば古來わが國は「ことあげせぬ國」といひ、議論よりも實行を貴んだものである。さればあの宏大な哲學と、機構とをもつ佛教も、日本に來ては「南無阿彌陀佛」の六字で事足やうになつたのである。

人の世のありがたさが本當に分れば、こちたき議論は用はない。六字のお名號で足りる筈である。かいふ風に考へてくると、わが國柄のありがたいことが、しみじみと分つてくる。

明治以來佛教の研究が進歩し、その哲學についても歴史についても、學者の研究は日進日歩の感がある。批評と研究は、いかなるものにも必要であるか、しかしそれが究竟の目的ではない。佛教究竟の目的は成佛にある。さればいかに批評と研究が進歩しても、信心がこれに伴はなかつたならば、何の益するところもない。信心の確立に役立のものであつてこそ、批評も研究も必要なのである。方今、佛教の信心が、その批評と研究とに伴してゐるか否かは、少しく疑ひなきを得まい。

直紀二千六百年を迎へ、皇國の國風を再認識するにつけても、生きるありがたさを心より感謝し、この身これ佛、娑婆即寂光土の信仰を、佛教童話によつて、兒童に教へることが大切であることを痛感する。